



Title	近世における京の漆器業の発展と象彦
Author(s)	星野, 祥子
Citation	デザイン理論. 2025, 85, p. 78-79
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/100283">https://doi.org/10.18910/100283</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 近世における京の漆器業の発展と象彦

星野 祥子 滋賀県立大学

はじめに

株式会社象彦は1661年（寛文元年）に象牙屋として創業し、18世紀半ばから漆器製造業で知られるようになった京都の老舗企業である。京漆器は室町時代頃から発展したとされ、公家や武家、大商家や神社仏閣など、いわゆる上流階級の需要を満たすための優雅な蒔絵を特徴としてきた。17世紀以降の京漆器の発展と展開という意味において象彦は重要な役割を果たしてきたが、先行研究は数件に限られ、研究が進んでいるとは言えない。このような背景を受けて発表者は、象彦の創業から現代にかけての歴史・漆器生産・漆器デザインの研究を進めている。

本発表は、象彦の当主である西村彦兵衛家が所蔵する家伝史料と、象彦に関する文献調査を元にした歴史研究である。創業から幕末までの象彦の歴史と、初代から四代までの経歴をまとめることで、近世における京の漆器業と象彦の実態を明らかにしようとするものである。

### 象牙屋創業家から西村家への家督継承

創業者は大阪平野町の長崎唐物交易株を持つ唐物商の安居七兵衛であり、象彦の前身である象牙屋を構えた。これを二代目として譲り受けたのが楠治兵衛である。楠治兵衛には二人の子供がおり、象牙屋の店を寺町通りの南北に分け、南本家を楠治兵衛が、北本家を楠治郎兵衛が受け継ぐ。ここで北本家の別家の一つに1732年に12歳で奉公に入ったのが、初代西村彦兵衛である。1756年（宝暦6年）に北本家から認められ別家し、西村彦兵

衛と名乗るようになる。その後、本家の南北楠家は絶家の道を辿る。北本家においては四代目で途絶えたのち、相続すべき筆頭人がない状態となり、家督を別家集団である「内和中」に引き渡すという書簡が確認されている。この書簡の宛先は、象牙屋八兵衛・清兵衛・彦兵衛・世兵衛・庄兵衛とあり、この五家が当時の別家集団「内和中」であることがわかる。西村彦兵衛は既に三代目の時代にあたる。

ここで推測される西村家が家督を継承するに至った経緯は、北本家が続く中、西村家は別家集団「内和中」の一つとして存在し、次第に別家筆頭となり、本家が絶家した後にやがては唯一事業を継承することになったと考えられる。

江戸時代後期から幕末までの西村彦兵衛の経歴と業績

・初代（1720-1773，継承1756年）

生まれは滋賀県野洲郡小浜村の出身で、西村典左衛門の三男、幼名を灌次郎といい、俗名を宗忠と称した。象牙屋の家督継承の経緯については先述の通りである。

『工芸遺芳』（三井高保 著，1890年）によると、漆器の技法に優れ、優雅にして風韻があったと評され、また菩提寺に掲げた白象に乗った普賢菩薩の呂色金蒔絵による偏額が素晴らしい出来であったと伝わっている。この偏額は二代の時代に起きた天明の京都大火により消失し現存しないが、原図と伝えられる「白象と普賢菩薩」の絵画資料が、西村家に所蔵されている。

・二代（1744-1803, 継承 1773 年）

初代の兄の五男であり、初代の長女が夭逝したため、象牙屋を継承した。俗名は行宣という。二代目は初代と共に漆芸の技法に通じ、蒐集家でもあった。二代の時代より「家訓」を編纂し始め、三代を経て四代の時代にもう一つの家訓である「年中行事記」が完成した。

・三代（1774-1832, 継承 1803 年）

俗名を延成という。特に蒔絵技術に秀でていて、御所の御用達を命ぜられた功績により、朝廷から蒔絵司の称号を授けられたと伝わっている。

・四代（1808-1875, 継承 1832 年）

三代の男子がいずれも夭逝したため、三代の三女きぬの養子として、伏見の塩屋辰右衛門より入家した。『名家歴訪録』（黒田譲 著、1899 年）によると、絢爛な蒔絵を施した贈答のための盃を多く作り評判を得て、御所漆器の御用を勤め、地方から次々注文が入るなど、象牙屋の中興を成した。1864 年（元治元年）の蛤御門の変で店舗が焼失するも再建するなど、困難に直面しつつも家業を繋いでいった。

明治時代に発刊された『尾参宝鑑』（小菅廉 等編、1897 年）において、江戸時代後期の漆工芸の名手として、近藤道志、飛来一閑、中村宗哲、山本利兵衛、佐野長寛と並んで西村彦兵衛の名が記されている。『尾参宝鑑』は尾張・三河地方の歴史や地理、産業などをまとめた文献であり、他の地方での四代彦兵衛の評判を読み取ることができる。

「竹林蒔絵婚礼調度揃」四代西村彦兵衛製（伝）

竹林文様の平蒔絵が施された 30 点の調度とその付属品で構成される婚礼調度である（図 1）。四代西村彦兵衛製の唯一の作品と伝わるが、印や箱書きがなく、依頼者や謂れは不明である。金の竹林の中に青金の竹を交え、竹林全体に金の微粉を淡く蒔き霞がかかったように仕上げ、竹が青々と生い茂る様子を風合いよく描いている。伝統的な竹の意匠とは異なる竹林の近景図を描くところに、

幕末の頃の画風を感じさせる。箱物から高杯のような円形の調度に至るまで、様々な角度から各面の竹林が響き合うように計算されており、洒脱で洗練された意匠が貫き通されている。また、薄造りの生地、平滑な塗面、かどの切立の際立ちに、職人の優れた技量を見ることができる。



図 1 竹林蒔絵婚礼調度揃 煙草盆

まとめ

今回は創業から幕末までの象彦の発展の歴史と、四代までの西村彦兵衛の経歴を調査した。西村家所蔵の家伝史料や、江戸時代の西村彦兵衛に関する記述を文献調査することにより、今まで明確でなかった象彦の実態を詳細に明らかにすることができたと認識している。特に、今回の調査により、作品がほとんど残っていないという事実が明るみになった。この事実は、分業制の職人を束ね、依頼主の要望に応えるべく製作を主導してきたことから、名を残す習慣がなかったであろうことが窺え、漆器商としての象彦を表しているといえる。

今後は、江戸時代中期の創業時から幕末にかけての作品の調査を続けながら、象彦の隆盛期にあたる明治時代から昭和時代初期まで、調査範囲を延伸し象彦の通史としてまとめていく予定である。

（調査に対し、十代西村彦兵衛であり株式会社象彦代表取締役社長である西村毅氏のご協力に感謝いたします。）